

### 第3回 武豊町プロジェクトの始動 —住民との協働の始まり



平井 寛 (日本福祉大学福祉社会開発研究所地域ケア推進センター 主任研究員)

#### はじめに

前回は、町と大学の間で7回の協議を重ね事業方針を決定し計画書が完成したところまでを記述した。しかし重要なのはこれからであった。前回記したように住民が事業を自分たちの自主的な取り組みに転換することができなければ、従来の介護予防事業と同様なものになってしまう。それでは福祉のまちづくりにつながらない。

今回は、住民が事業を自分たちのものとしていくカギであったワークショップの内容を中心にその難しさとおもしろさ、町職員の意識の変化を書いていく。

#### 住民説明会の準備

武豊町の地域サロン事業（以下、本事業）は住民ボランティアによる自主的な運営を行うことを想定している。そのボランティアを募集するため、住民に事業を説明し協力を求めることを目的に住民説明会を開催した。その住民説明会に先立って、町の高齢者を対象としたアンケート調査（事前調査）と住民説明会で使用するパンフレット作成を行った。アンケート調査は、2006年7月、武豊町の要介護認定を受けていない55歳以上の高齢者全体を対象として行った。この調査の目的は二つあった。一つは事業開始前のデータ収集、もう一つはアンケート調査を通じて事業協力ボランティアを募集することである。事前データ収集はこの事業を希望する人がいるのか、また「閉じこもり」などの要介護の予備群がどのくらいいるのか、サロン事業のような交流事業のニーズがどれだけあるのかというニーズ評価を行

うものである。またこの事前データと事業開始後の事後データの比較により事業の効果を明らかにしようとするねらいがあった。

協力ボランティアの募集は調査票の最後のページに事業の説明をしたうえで、協力の可否を尋ねた。協力してもよいという人には、説明会の案内を出す際の宛先となる住所を書いてもらうようお願いした。これに対し、「中心となって企画運営に関わってもよい」「可能な範囲で協力してもよい」と答えた人は調査全体の回答者2,700人中500人を超えた。約5人に1人が事業への協力の意志があることがわかった。この数字にわれわれは大いに勇気づけられた。

住民説明会では住民に事業の理念を理解してもらう必要があるが、80頁以上もある計画書を読んでもらうのは大変である。そのため理念や方針をまとめたパンフレットを作成することになった。筆者がたたき台をつくり（いまから考えるとひどいものだったが）、町と協議しながら仕上げを行って完成させた。内容は、本事業が必要とされる背景として高齢化や要介護認定者の現状データのほか、事業の方針、先行事例紹介から成っている（図1）。このパンフレットは、いまでもワークショップなどで議論が行き詰ったとき、どう進めばよいか迷ったときに立ち返る原点になっている。パンフレットの表紙にある「楽しく、無理なく、介護予防」（連載第1回を参照）は一つのキーワードになっている。

説明会への参加呼びかけは町の広報に加え、先述のアンケートで「中心的な運営者として参加してもよい」と回答した住民への案内状送付や保健推進員や食生活改善委員などの町の保健センターが関わる既存のボランティア組織メンバーへの連絡により行った。

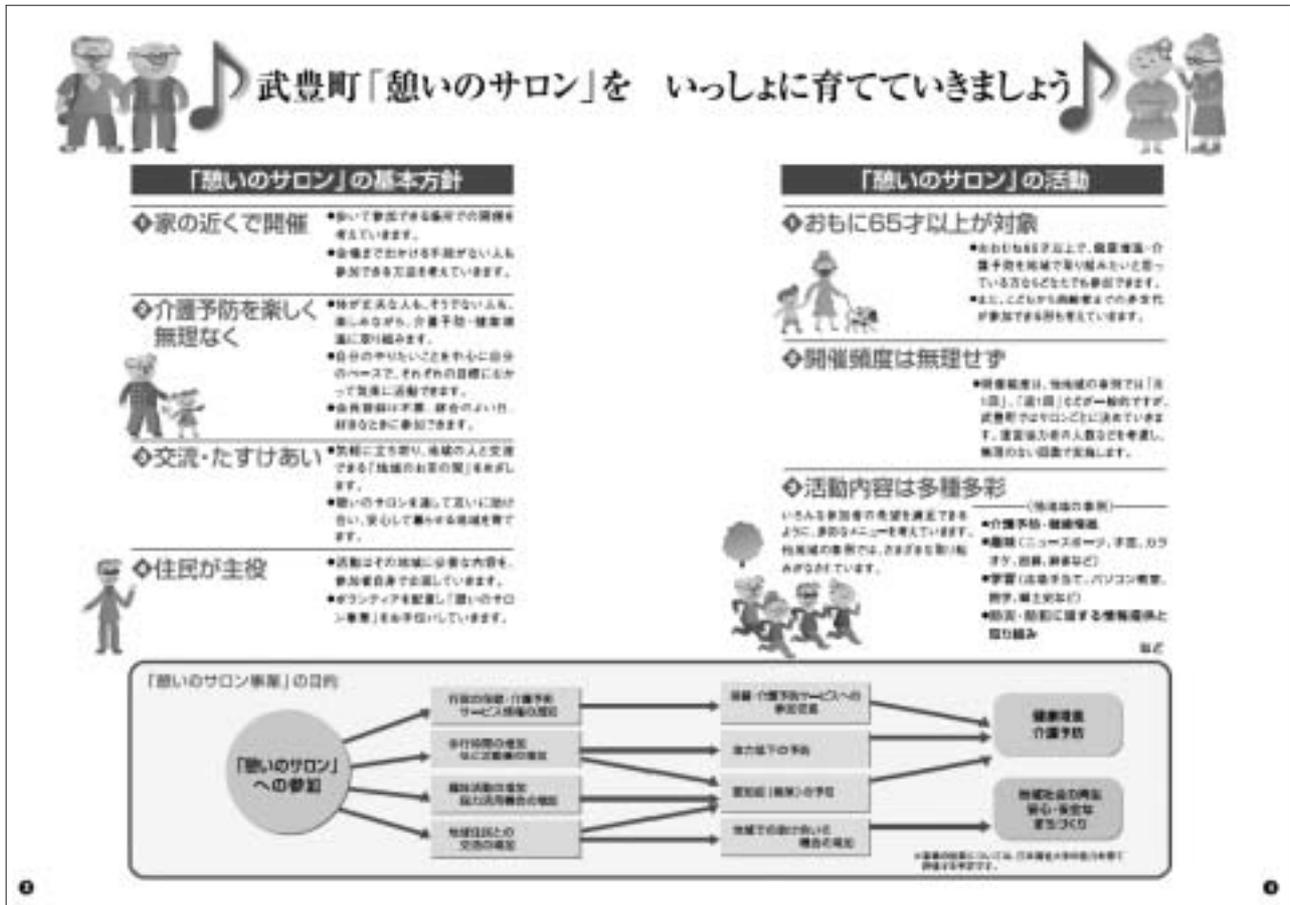


図1 サロンの基本方針（パンフレットから）

## 住民説明会の開催

2006年10月31日にサロン運営ボランティア募集を目的とした住民説明会を行い、事業の理念・方針の説明とボランティア募集の呼びかけを行った。果たしてどれだけの人数が集まるのかと心配していたが、住民説明会には62人の参加があった。まず保健センターの保健師Kさんからパンフレットを用いて事業内容の説明があり、続いて日本福祉大学のK先生がデータ分析結果を紹介しつつ事業の意義を説明した。

参加者の感想をみると、「サロンの必要性を感じた」「自分の地域にほしい」という意見が多くみられた。「町がやっとサロンの必要性を考え出したかと思った」と以前から待望していた参加者もいた。また今後の活動について、「体操をやりたい」「おのお

のの得意なことを教え合って頭を活性化できればいい」などのメニューに関するものや「区民館を活用すべき」「区長・組長を参加させるべき」という事業具体化に向けた意見も出された。

また参加者が説明会参加の際に期待していたこととして、「自分の知識や経験が生かされる」「町の人とつながりを持ちたい」「町のために役立つことがないかと思って参加した」などを挙げており、自分自身の生きがい探しや他者との交流、そして社会の役に立ちたいという意欲が動機になっていることもわかった。説明会后、参加者のうち52人から事業への参加協力の表明があった。

## ワークショップに向けての不安

本事業において、ワークショップは町のトップダウンで始まった事業をボトムアップに転換し、住民

が事業を自分たちのものとしていく重要なプロセスとして位置づけられている。

ワークショップとは、「先生や講師から一方的に話を聞くのではなく、参加者が主体的に論議に参加したり、言葉だけではなくからだやこころを使って体験したり、相互に刺激し合い学び合う、グループによる学びと創造の方法」であるといわれている。ワークショップを行うには、ワークショップを回していくファシリテーターという役が必要になる。ファシリテーターとは参加者主体の学びを促進し容易にする役割であり、単なる司会というよりも「進行促進役」「引き出し役」「そそのかし役」であるといえる。しかし、町の職員には多人数のワークショップでファシリテーターをした経験がなかった。そこで町の職員と保健推進員や食生活改善委員数人を集めて一度ワークショップを体験する研修を行おうということになった。この研修ではKJ法を使ってサロンのイメージや武豊町のよいところなどについての意見を出し合い、整理するという手順を日本福祉大学のH先生のファシリテートで実際に行ってみた。

KJ法とはグループ内での多様な意見を類似性や共通性のあるものにグループ化して整理し、新たなアイデアを引き出していく方法である。具体的にはあるテーマに沿って参加者おのおのが小さなカードに意見や情報を書き、それを一枚の大きな紙に整理しながら貼り付けていくものである。声に出して発言する場合に比べカードに書くことで、声の大きい一部の人だけでなく全員の意見を均等に引き出すことが可能である。

第1回ワークショップのファシリテーター役を担うことになっていた保健師のKさんも「KJ法により問題や課題がわかりやすくなり、整理しやすくなるということが実感できた」とこの方法の有効性を感じていたが、自分が回していく自信が持てなかった。「KJ法を習ったけど何のテーマでKJさせるんだってということもあって、もう誰かに来てもらわないと無理無理無理無理となって。あの頃は、本当に大学の先生たちがいないとうちらじゃ無理というのを私は確実に思っていたんですよ」とその当手を振り返っている。

ワークショップではどんな意見が出てくるかわからない。そんなときにどう対応したらいいのかわか

らないという不安がある。Kさんはこの事業のために通常の業務のほかに多くの労力を注いできているし、事業に期待もしている。ワークショップがうまくいかなかったらこの事業が失敗するかもしれないという思いがあったのかもしれない。決められたことを間違いなく実施していくのが行政の仕事の通常スタイルである。何が出てくるかわからないワークショップには不安があって当然であっただろうと考えられる。

結局Kさんはファシリテーター研修を担当したH先生に日程の調整をお願いし、第1回のファシリテーターを依頼することにした。また同時に第2回以降のワークショップも先生に依頼してやることを考えていたが、H先生も筆者もなんとかして第2回以降は町職員の手でやるようにしなければいけないと思っていた。主たるファシリテーターはH先生に決まり、筆者は先行事例の紹介をすることになったが、Kさんは何をするかは決まっていなかった。その時点では全体の進行を行う司会ということになっていたかもしれない。ワークショップ直前、筆者はKさんにアイスブレイキングをやってみてはと提案した。アイスブレイキングとはその名のとおり、氷を溶かすように場の雰囲気をやわらげて発言しやすい状態にすることである。話すのが得意で笑いがとれるKさんにはうってつけの役だ。Kさんも経験があるらしく、H先生の前座として行うことに決まった。

## 第1回ワークショップ

ワークショップは筆者の事例紹介から始まった。ワークショップで参加者がアイデアを出す際の参考にしてもらうためだった。続いてKさんによるアイスブレイキングが行われた。ここからがワークショップ本番である。受付時に渡した名札の色で参加者を五つのグループに分けた。自己紹介で住んでいるところや会場に来た交通手段を言い合ったり、握手、円陣を組んで手を重ねての声出し、「あ」から始まる食べ物の名前を出して行ってグループ対抗で数を競うなどのメニューを行った。会場は参加者の笑い声があふれ、大いに盛り上がった。

その余韻を引き継ぎ、H先生のファシリテートで

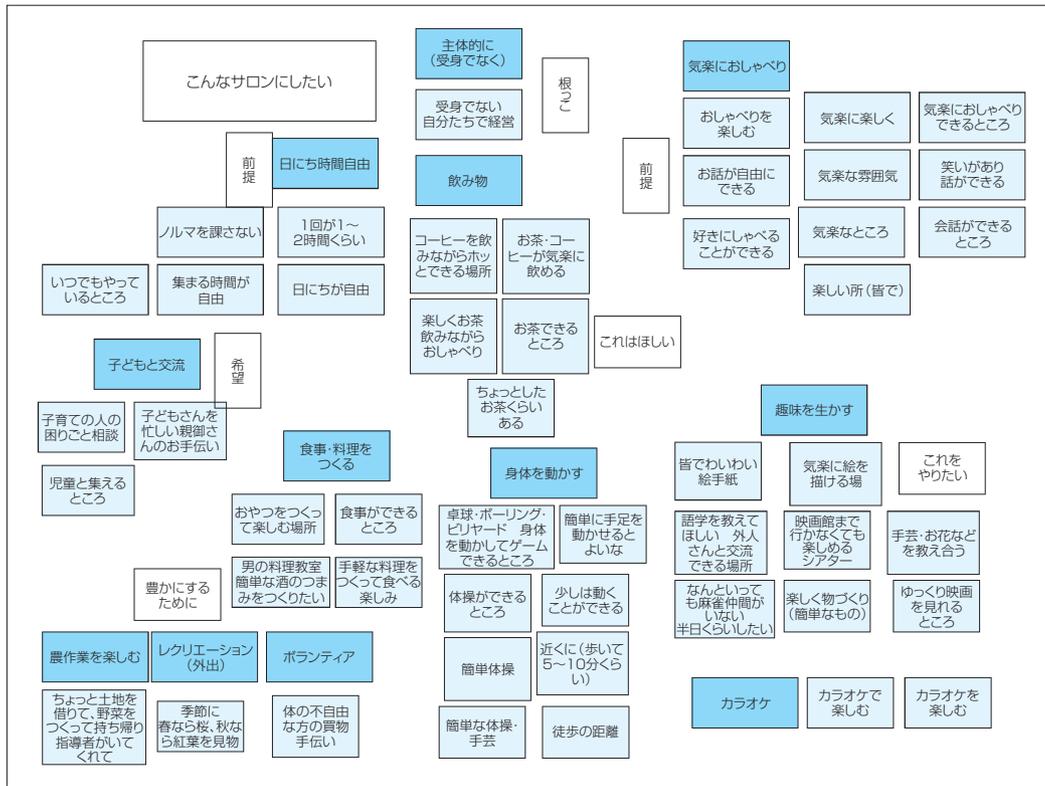


図2 KJ法で整理されたサロンのイメージ

「どんなサロンにしたいか」というテーマでグループ内で意見を出し合い、KJ法で整理を行った(図2)。各グループで活発な議論が行われ「気楽に楽しく」「ノルマを課さない」「自由」などの基本方針についてのものや、「おしゃべりができる」「簡単な体操をする」などのメニューについての提案が出された。

参加者の感想で最も多かったのは、「楽しかった」「意見が活発に出た」「グループの人がよかった。すごかった」「気軽に話し合うことができ楽しかった」「もっと時間がほしい」と楽しくできたという意見であった。積極的に発言できたという満足感も伝わってきた。一方、「場所・時間・費用などもっと具体的な話をしたい」「開催場所の候補を知りたい」など具体的な話に入りたいという気持ちを持っている人も目立った。ワークショップ中にも、「サロンのイメージづくりをしているのはまどろっこしいので早く具体的な話がしたい」という発言もあったが、H先生はまずイメージを共有することが重要であることを説明して理解を求めた。

## 第1回ワークショップを終えて

第1回ワークショップは大成功だった。これまで何度もほかのワークショップに参加している先生方も「こんなに盛り上がるのは珍しい」という感想だった。Kさんによるアイスブレイキングが効果的だったのは間違いない。

後日の町と大学の打ち合わせでは、次回のワークショップに向けて、要望として出されたサロン候補地の場所など利用可能な資源やその利用料などの情報を準備することなどが話し合われた。この後、ワークショップの事前に町と大学で打ち合わせをし、事後に反省会をして次に向かうというサイクルができていった。そのことで町職員もやっていけるという自信を持った様子がKさんの振り返りから読み取れる。「H先生のやり方を具体的に提示してもらって、KJ法を講座でやったけども、そこでも結局じゃあ実際どうしたらいいのというところを私はつかめなかった。だからずっとつかまえておかなきゃいけないというのは1回目のときまで思っていたんで

す」[1回やって、案外意見がたくさん出てきたというところが、ああやれるというか、これでいいんだというように確認できた。全然自信にはならなかったんですけど、こういうスタイルでやれるんだなあという、なんとなく漠然としたものを思えて、それが自立なのかいまも自立しているのかよくわかりませんが。最初のスタートの頃は先生をつかまえて、得意な先生は誰だとか、これをやるには誰をつかまえたらいとか言っていたところが、いつのまにか先生を呼ばなくなって自分たちで話し合っ自分たちでやるようになってきたというのは、多分1回目でわりとやれてきたところで、やらなきゃいけないという義務感ではないけども、やっていけるサイクルが回ってきたような感じはした]

## おわりに

住民への事業参加の呼びかけを行い、運営主体と

なるボランティアグループが立ち上がった。初めてのワークショップも成功し、住民主体の事業は第一歩を踏み出したといえる。町職員にとって当初不安があったワークショップのファシリテートだったが、第1回のワークショップを終え一定の手ごたえを感じ始めた。

今回は先行事例視察、第2回以降のワークショップを通じ、事業の具体化に向けた課題に取り組んでいったプロセスを記述する。協議内容が抽象的なものから具体的なものへと変わっていくほど、おのおの目指す事業像の違いがはっきりしてくる。ボランティアの間で、ボランティアと町の間での関係の構築と摩擦について書いていきたい。

## 参考文献

中野民夫：ワークショップ—新しい学びと創造の場—。岩波新書，2001